

車はどこか見覚えのある場所に停車した。とうとう亜丁に着いたのだ。

「まず何か食べないか？まだ早朝だ。そんなに急いで行く事も無いさ」

アーロンが言った。みんなも同感だ。

他の車に乗っていた乗客達はすぐに出発したようだったが、私達は公園管理事務所の裏手にある小屋の中に入っていった。8月とはいえ、高度の高い土地である亜丁の朝はかなりの冷え込みで、小屋の中にストーブが焚いてあったのが嬉しく、私は真っ先にストーブの脇に転がしてあった丸太の上に陣取って腰掛けた。

そこは食堂という訳ではなく旅行者が宿泊なども出来る場所なのだという事だったが、部屋の中には山の道具や馬の鞍などが雑然と置かれていて、どちらかといえばタクシードライバーや亜丁でガイドやポーターなどをやっている地元の者たちの休憩所のように感じられた。一応中国語で書かれた手書きの、麺の名前ばかりがならんだメニューもあり、それぞれが自分の好きなものを注文すると、その場にいた男が一つしかない鍋とコンロで、のんびり一つ一つのオーダーを作り出した。ひとつ作り終わっては、次の料理を作るのだから時間がかかる。

別に急いでいる訳でもない私達はのんびりと自分の麺が出来上がって来る順番を待ちながら、ここまで運転してきたタクシードライバー達やその場にいた地元の人達とストーブの回りで輪になって談笑した。

気のいいドライバー達はそれぞれに、「亜丁に来たいという旅行者がいたら紹介してくれよ」と例のワンパターンな車の絵の名刺を取り出して私たちに配り、又しても私の手の中には数枚の名刺が溜まってしまった。誰かに紹介するにしたってこれじゃあどの名刺を渡したら好いものやらわからないじゃないか。

「馬はどうだい？」

その場にいた馬方も自分の馬を売り込んでくる。それに乗って亜丁観光しないかと誘っているのだ。

公園管理事務所からおよそ7、8キロ程緩やかな坂道をのぼっていったところには洛絨牛場と呼ばれる三方を山に囲まれた湿原があり、夏には可憐な高山植物があたり一面花の絨毯の様に咲き乱れ、土地の人が神と崇める亜丁三大神山のうちの央邁勇、夏若多吉の二大神山が真夏でも融けない雪と氷の冠を戴いた姿で眼前にそびえ立つ、まさに桃源郷のように美しい亜丁自然保護区メインの景勝地となっている。亜丁を訪れるほとんどの観光客は公園入り口の管理事務所まで馬を手配するとそれに跨って洛絨牛場まで行くのだ。

以前、私がこの地を訪れた時にも馬に乗った。

ただ皆について行っただけで全く旅程を把握していなかった私は、その時まで馬に乗る事など思いもよらずにいて、亜丁に到着したバスを降りたところに鞍をつけた馬のたづなを引いて馬方達がソロソロと集まってきたところで初めて「え～！！馬に乗れるの～！？」とはしゃいだものだ。

キャンプ用の衣服や寝袋のつまみみんなの大きなザックは1頭の馬の背中にまとめてくりつけ、私達は手ぶらで馬の背中に跨り、美しい風景を満喫しながらのんびりホーストレッキングを楽しんだ。

しかしながら今回は事前に旅費を振り込み、すべてを案内人にまかせた大名観光旅行ではなく、乏しい経済状況をやりくりしながらの貧乏バックパッカー旅行者の私だ。日本円から中国元への両替を忘れていたところを烏里氏の友人に急場を救ってもらい、いくらかの中国元を手に入れてはいたが、それはこれから先の旅程を思えばまだまだ心もとない金額だった。とりあえず何処かで再び両替できるまでは出来るだけ儉約に努めなければならぬ状況だ。

馬の歩みは人が歩く速度とさほど変わらず、以前馬に跨って通った道のりを思い返しても歩けない距離ではなかった筈だ。でも・・・

みんなの目が、私の大きなザックに注がれていた。サブザックと合わせれば10キロ近くはありそうに見えた。

「^{ユズンツ}元子、この荷物どうするつもり？」

心配そうにシャオチンが私の顔をのぞきこむ。

「俺たちは歩くけど、君は馬を雇ってもいいんじゃないか？こんな荷物を自分で背負っていくのは大変だ。じゃなきゃ要らない物は出してここで預かってもらえよ。亜丁から帰る時に取りにすればいいさ」

シャオチンの言葉を継いでアーロンも言った。

しかしその時の私は、何故か頑なにこの荷物は亜丁に滞在するために必要な物だから置いていく訳にはいかないという気持ちを変える事ができなかった。

公園内にはいくつか宿泊施設のある場所があるらしかったが、私は前回亜丁を訪れた時に滞在した洛絨牛場ルオロンニウチャンに泊まる事に強くこだわっており、いざとなったら野宿も辞さないくらいの覚悟も少しはあったのだ。しかし公園内の宿泊施設について尋ねると誰もが泊まれる場所はあるとはいうのだが、洛絨牛場についてはどうもはっきりしない。地元の人たちにしてみれば自分達は泊まらないので

詳しくは知らないという事なのだろう。

「ううん、いいの。荷物は全部持って行く。でも馬は高いから雇いたくないなあ・・・」

どうすれば良いか決断しあぐねていると、その場にいた男達が「ポーターはどうだ？」と新たな営業を仕掛けてきた。

と、いつの間にかその場に来ていた少年が手を上げると笑顔で前に出てきて「俺がポーターするよ！どう？」と名乗りを上げた。年の頃は15、6歳と思われる、ほっそりした体型のまだ幼さの残る顔立ちの少年に「いくら？」と尋ねると、少しはにかんだ様子で「俺、判んないや。あなたが決めて」と答えるのだ。

どうやら職業としてポーターをやっている訳ではなく、少年がお小遣いを稼ぐためのアルバイトを申し出ているような感じだ。

彼の商売っ気のなさや引かれ、この少年を雇ってもいような気持ちになった私は「相場が判らないから、いくらなのか言ってよ」と更に尋ねるが彼も同様に答えずにいるのを見かねたように、アーロンがその場にいた大人たちを振り返り「いくら位が丁度いいかな？」と声をかけた。

数人の男達が口々に適当な金額を口にして意見がまとまると、ここまで話が進んだのを断るのも野暮だと可愛い顔をした少年を雇うことに決めた私は、とりあえず一番近くのポイントである、途中の沖古寺まで30元という事で話を決めた。その時点での私は沖古寺が現在位置から洛絨牛場までの道のりで、何処のポイントにあるのかも良くわかっていなかったのだが、そこから先の事は行き当たりばったりだ。とにかく現在の亜丁の様子がどうなっているかもよくわかっていないのだ。

それぞれが麺も食べ終わり、そろそろ出発しようという頃合に、タクシードライバーと話していたアーロンがタクシー運賃を払うために私を呼んだ。稲城から亜丁までは200元という事だったので4人で乗ってきた私たちは一人50元という訳だ。私がお金を支払おうとすると、それを遮るようにアーロンが言った。

「なあ、俺達は彼のおかげで亜丁の入場料150元を払わずにすんだんだ。だからいくらか彼にお礼しなきゃならないんだが、ひとり100元でどうだ？」

どうせ払わなきゃならなかった金だから惜しくはないさ。彼はとてもいい奴だし、旅行者から入場料をぼったくってる管理事務所に納めるくらいなら、彼にあげたほうがいいってのもんだ。ウィンはガイドのパスを持っているから元々入場料を払う必要は無いんで、俺とシャオチンと君とで300元彼に払うことにしよう」

(ええええー！?)

私は内心叫び声をあげた。それはタクシードライバーの彼に払うお金が惜しいと言う事よりも、その金額の高さに驚いたからだ。

彼が稲城からここまで3時間かけて車を運転する代金が200元だというのに、旅客がもぐりで自然公園に入場する手助けをするのが300元!?

しかもそれはタクシードライバーが請求しているのではなく、アーロンが申し出た金額なのだ。昨日、上海小姐から都市部で働く一般的なOLの月給が1000元程度だと聞いたばかりだ。都市部と比べてさほど現金収入のなさそうな地方の人間にとっての300元とは相当な価値がある金額に違いない。タクシー運賃と合わせればこの日の彼は早朝ほんの数時間車の運転をただけで、都会のOLが稼ぐ月収の半分を手にしてしまう事になる。それがこんなに簡単に手に入ってしまったいいのだろうか。

アーロンがこのことに関して事前に相談してくれなかったことが腹立たしかったが、タクシードライバーが嬉しそうにニコニコしている目の前で、そんな金額は高すぎるとも言えず、私は納得のいかない気持ちのままタクシー乗車賃の50元を含め150元を彼に支払った。

さっきまではこれで旅費が節約できた喜んでいただけ、私も相当現金なものだが、一言では言い表せないような重い気分を味わうことになるなら、あの場で普通に150元払った方が良かったように思えてくる。

私にはアーロンの気持ちも分かるような気がした。明るく快活な彼は間違いなく好青年だ。自然を愛し、単なる観光よりは人との触れ合いや会話を求め、積極的に土地の人たちとの関わりを持とうとしていく。出来るだけ無駄な出費を抑え質素に旅を楽しみながら、土地の文化や食べ物に興味を持ち理解しようとする彼の旅のスタイルは、観光客としての目線ではなく、できるだけ土地の人たちと同じ目線で同じ生活を体験したいと願う私の旅のスタイルに共通していた。

昨日の出会いから今まで、温泉宿の家族やタクシードライバー達と普通の旅行者以上に親しく語り合う機会を持つ事ができたのもアーロンと一緒にだったからだ。

結局、アーロンは、自らの好む土地の人たちが好きなのだ。その好意を表現するために気前よくお金を払い彼らを喜ばせたいだけなのだろう。だけど・・・なんで先に相談してくれなかったの？心の中でつぶやいた。

私の複雑な気持ちとは裏腹に、アーロンは自分の行動に満足している様子だった。一度は入場料を支払わずにすんだと喜んでいて私にはどちらが正しいとも言い切れない問題だ。夢に見ていた亜丁との再会は、思いもよらずほろ苦いスタートをきることになってしまった感じだ。

せっかく懂れていた土地に着いたばかりだというのに・・・。人の良すぎるアーロンがちょっぴり恨めしかった。

(次号に続く)